

方々に対し、厚くお礼申し上げます。

12 梱 包

苗 村 元

輸送方法の特殊さもあって、1個単位の重量を少なくするため、アタックザックとダンボール（防水二重ダンボール $30 \times 30 \times 40 \text{ cm}$ ）だけに全てを梱包した。ダンボールはガムテープで蓋をするだけという簡単なものであったが、持ち運びを常に我々でやったので損傷は全くなかった。長物については、このダンボールを2個合せたものにまとめた。入山中も移動にはこれを使用した。雪上でも充分使用できるという自信を得た。大きさは、入山中にも空輸にも使え、なおかつ全ての装備を入れられる範囲のものとして製作したものであるが、かえってどちらにも不便なものになってしまった。特に行動中背負うには幅がありすぎて後へ引かれ、歩きづらかった。大小2種類の大きさに作れば、有効な使い方ができたと思われる。軽飛行機に積むには袋に入れた方がそれだけ効率よかった エアードロップも一般には袋を使うそうであるが、中のものを吟味し、パッキングには細心の注意をはらわないと思わぬ程破損が多くなる。我々はダンボールのままでも落したが、かえって損傷は少なかったようだ。

13 気 象 報 告

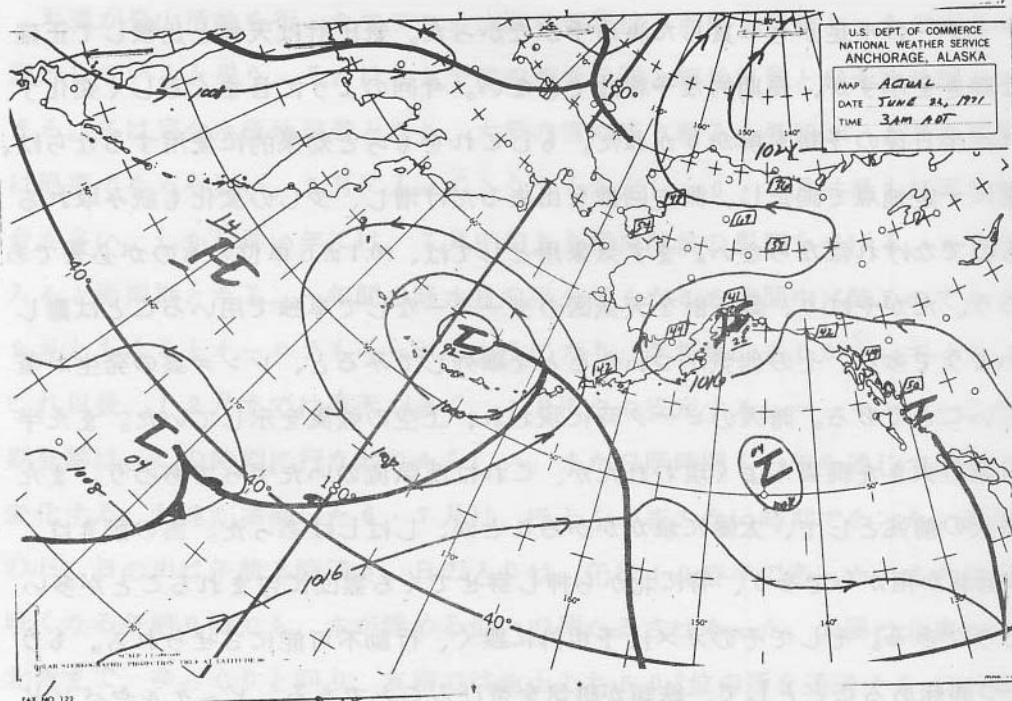
苗 村 元

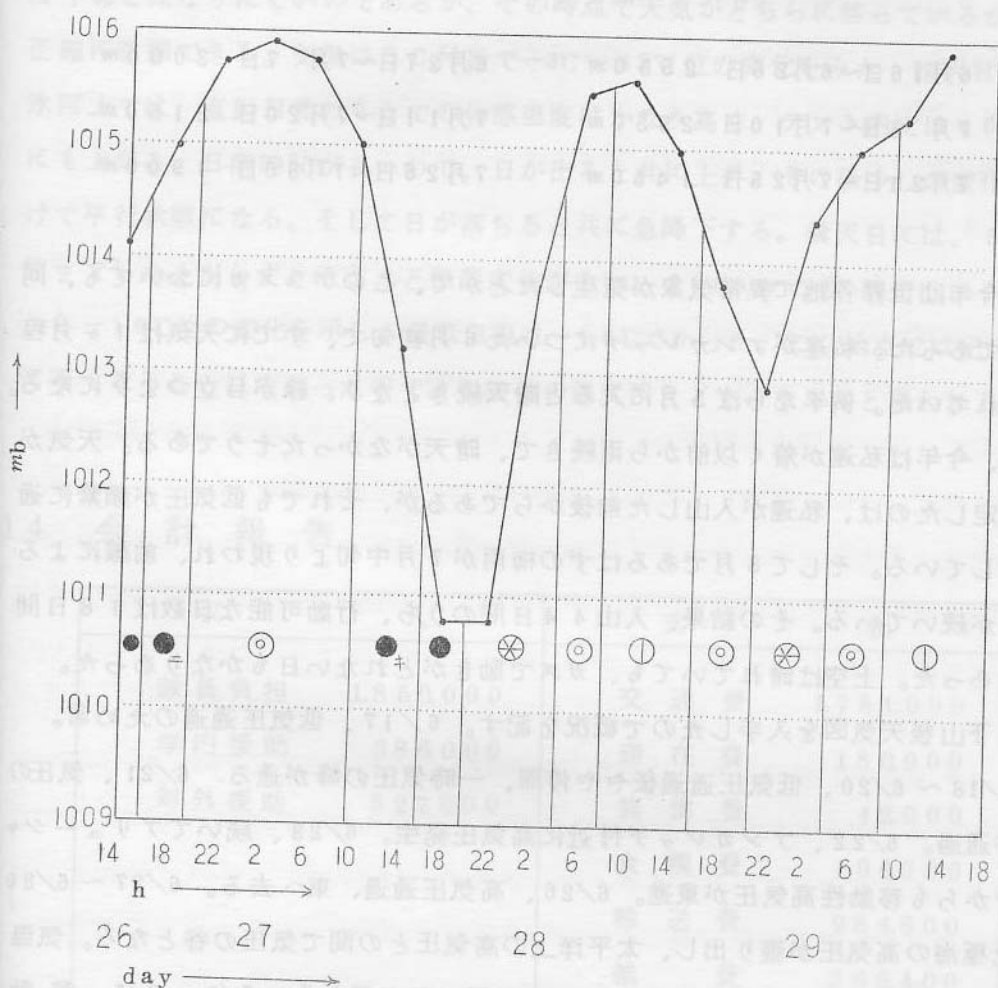
月 日	天 気	備 考
6 16	①	午前中ガス
17	① ⊗	
18	⊗ ①	
19	⊙ ①	
20	⊗ ⊙	
21	⊙ ●	
22	○	
23	①	
24	○	
25	○	
26	①	積雪 3 cm 正午より雷
27	⊗ ⊙	

月 日	天 気	備 考
6・28	☉ ⊗ ☉	気温下がる
29	⊗	積雪 50 cm 気温下がる 風強
30	⊗	積雪 50 cm 気温下がる
7・1	☉	
2	①	気温上がる
3	⊗ ☉	ガス
4	⊗ ☉	ガス
5	☉ ①	ガス
6	①	
7	①	
8	①	
9	①	
10	①	
11	●	ガス 2300 m 以高は雪
12	●	〃
13	●	ガス 〃
14	● *	ガス 〃
15	☉	ガス
16	⊗	積雪 20 cm
17	☉	
18	① ☉	
19	☉	
20	● *	
21	☉	ガス
22	⊗ ☉	
23	☉	
24	☉ ●	2000 m 以高は雪
25	●	夜風強
26	●	正午雷
27	☉ ●	
28	☉ ⊗	午前中風強
29	☉	
30	☉ ●	

私達が登山活動を行ったアラスカ山脈の気象は、亜極地気候というのがよく表わしていると思う。それは北太平洋の海洋気候と極地気候との干渉地域といえる。冬は完全な極地気候となり、大量の雪が降り積る。特に2・3月の気象は絶悪であるらしい。5月に入ってようやく安定し、6・7月は最も好天の割合が多い。しかし早い年には、7月中旬より海洋気候の影響を受ける。8月に入ると梅雨期となる。一年間の降水量の半分近くがこの期間中に降るのである。9月ともなるとオーロラもみられるようになり、冬將軍の走りがやってくる。これ以後、12月までは悪天が多く、1月にやや安定する。マッキンレーの冬期登攀は、この時期に行なわれたらしい。また日照時間も一年を通じて大きく変化する。私達が活動した6・7月は、ほとんど夜の無い時期であった。夏至の日、日の出は午前2時過ぎ、日の入りは、午後10時半であった。また最も暗くなる午前0時でも、本が読める位の明かるさはあった。太陽は北東から北西まで、ゆっくりと回り、真南では地上より50°位の所を通過する。日が落ちても、いっこうに暗くならないのには、慣れるのに少々時間がかかる。それを前後として日照時間は短くなるのであるが、8月初旬でも星の見えるのは4時間位であった。冬至には、これが丁度逆転するのである。さて6・7月の気象であるが、例年日本でいえば春山程度の天気変化をする。私達はだいたい3～4日の天気周期をみせるということを知っていた。それは北極気団が去り、安定したところへアリューシャン方面から移動性低気圧が周期的にやってくるからである。変化の仕方も日本の春山に似かよったところがある。ところで、これの予報であるが、天気図の情報が得られなかったので、確かなものは出せずじまいであった。私の役目としては、ただの記録取りに終わってしまい、残念に思っている。一応ラジオは稜線に上がれば、入電できたが、天気予報らしきものはあっても、天気図をつけられる位に詳しいものはなかったようである。私達を運んだ飛行機のパイロットも、電話で直接問い合せていたくらいであるから、多分ラジオによるそういった詳しい放送はないのであろう。他に予報の手段として、観天気、周期、気圧計等で行おうとしたが、どれも満足が得られなかった。今回の場合、周期がつかめなかったことが大きく災いし、観天気も

データーの不足から一貫した決め手がなかった。気圧計は天候と比較して正確な動きを示すが、長期的な予報はできない。今回のように目まぐるしく変化すれば半日後の予報も解かりかねた。もしこれをもっと効果的に使用するならば、常に一定地点で測定し、測定回数を出来るだけ増し、少しの変化も読み取れるものでなければならない。まず気象用としては、0.1mb単位のものが必要であろう。だがやはり、気圧計を天気図のデーターなしで単独で用いることは難しいようである。その他気がついたことを羅列してみると、レンズ雲の発生が著しいことである。晴天のピーク時に現われ、上空の強風を示していた。また半円型の大きな渦雲もよく現われたが、これは乱気流のいたずらであろう。また悪天の前兆として、太陽に傘がかかることが、しばしばあった。雲の動きは、大抵北か南からであり、特に北から押し寄せてくる雲団に包まれることが多いようである。そしてそのガスは予相外に濃く、行動不可能にさせられる。もう一つ興味あることとして、鉄類が磁気を帯びることである。ビッケルやバンドのバックル等によって、コンパスに大きい狂いが生じる。もともとこの地点では真極点と磁極点の方向が29°も違うので、コンパスの扱いには注意しなければならない。時計は耐磁性のものが必要であろう。





—記録に関して—

上記の表は観測点の高度が少し異っているので、ここに記す。

6月16日～6月26日	2550 m	6月27日～7月 7日	3000 m
7月 8日～7月10日	2550 m	7月11日～7月20日	2150 m
7月21日～7月25日	1450 m	7月26日～7月30日	1900 m

今年世界各地で異常気象が発生したとかで、このアラスカにおいても、同様であった。私達がアンカレッジについた6月初旬で、すでに天気は1ヶ月程遅れていた。例年ならば5月に入ると晴天続きとなり、緑が目立つようになる。が、今年は私達が着く以前から雨続きで、晴天がなかったそうである。天気が安定したのは、私達が入山した前後からであるが、それでも低気圧が頻繁に通過している。そして8月であるはずの梅雨が7月中旬より現われ、前線による雨が続けている。その結果、入山44日間のうち、行動可能な日数は18日間であった。上空は晴れていても、ガスで動きがとれない日もかなりあった。

下山後天気図を入手したので概況を記す。6/17、低気圧通過のため雪。6/18～6/20、低気圧通過後やや停滞、一時気圧の峰が通る。6/21、気圧の谷通過。6/22、アンカレッジ付近に高気圧発生。6/23、続いてアリューシャンからも移動性高気圧が東進。6/26、高気圧通過、東へ去る。6/27～6/30北極海の高気圧が張り出し、太平洋上の高気圧との間で気圧の谷となる。気温除々に下がる。7/2、高気圧弱まり、気圧の谷が消える。7/3～7/5、移動性低気圧東進中。7/6～7/10、東高西低、前線を供ねった低気圧がベーリング海にあるが、アラスカ全体を高気圧が被っている。7/11～7/12、高気圧去り、前線を伴った低気圧が東進。7/13～7/16、梅雨気象、低気圧通過。7/17、前線去るが依然気圧の谷。7/20、前線通過。7/21～7/22、弱い気圧の峰。7/23、低気圧近づく。7/24、前線を伴う低気圧通過、梅雨気象。7/26、閉寒前線。7/28～7/29、気圧の峰。7/30、低気圧通過中。

気圧と天気変化のグラフは、4時間毎に気圧を測定したうち、7月26日～

7月29日までを、天気の変わり目の大体の時間で区切ったものである。これによると気圧は天気変化の約6時間前に変化し始めている。どうもこれ位では予報とはなりにくいのであるが、その時点で天気がどちらに移っているかは正確に掌握できる。気温はB C付近で $-3^{\circ}\text{C} \sim 12^{\circ}\text{C}$ 位の変化をみた 晴天日の氷河上では、直射日光のもとでの体感温度はかなり高く、テント内では 40°C にも上がる。日照時間が長いので、日が出ると共に上昇。その後少しの変化だけで平行状態になる。そして日が落ちると共に急降下する。曇天日には、 5°C 位までしか上がらず、ほとんど温度変化がない。 3000m の稜線では、 3°C から -10°C 位の変化を示し、最低気温は -16°C であった。この地点では完全に暗くなることはなかったので、この位の温度にとどまったものと思われる。

14 会 計 報 告

収 入		支 出	
隊員負担	1,850,000	交 通 費	1,781,000
学内援助	386,000	滞 在 費	180,000
対外援助	527,000	装 備 費	42,000
		食 糧 費	106,000
		輸 送 費	284,600
		雑 費	369,400
計	2,763,000	計	2,763,000